

2023.2.27 Kai

資本論 第1巻 資本の生産過程 第5編 絶対的剰余価値と相対的剰余価値の生産 第16章 剰余価値率の種々の表式

■ あらすじとイラストでわかる資本論 文庫ぎんが堂

- ・剰余価値率を表わす式を別の表現にしてみよう。
- ・(剰余価値÷可変資本) = (剰余価値÷労働力の価値) = (剰余労働÷必要労働)
- ・初めの2つの式が、価値と価値の比率を表わすのに対し、3つめの式は時間と時間の比率を表わしている。
- ・いっぽう、古典派経済学では、以下のように表わしている。
- ・(剰余労働÷労働日) = (剰余価値÷生産物価値) = (剰余生産物÷総生産物)
- ・この場合は、総売上げに対し、利益の割合を示しているにすぎない。
- ・すると労働者の搾取がおのずと低く見える。
- ・例えば労働日は12時間で剰余価値率が100%とするとき、初めの式では次のように表現される。
- ・(6時間の剰余労働÷6時間の必要労働) = (3万円の剰余価値÷3万円の可変資本) = 100%
- ・2つの階級の取り分が明確となっている。
- ・いっぽう、古典派経済学ではこう表現される。
- ・(6時間の剰余労働÷12時間の労働日) = (3万円の剰余価値÷6万円の価値生産物) = 50%
- ・この場合、剰余労働または剰余価値の割合がけっして100%にならない。
- * 例えばイギリスの農耕労働者は4分の1が自分の取り分、資本家の取り分は4分の3だ。
- ・この式では搾取率が75%で表現される。
- ・しかしこれは明らかに300%が正しい。
- ・このように、剰余価値は、利益や利子等とその姿を変えようとも、その正体は端的に不払い労働の結晶なのだ。

※剰余価値とは労働者が働いたことで生み出されるプラスαの価値、つまり資本家の懐に入る利益のことだ。

- ・そのピンハネ比率を出す式とは、「剰余価値÷労働力の価値」。
- ・またこの式は、時間に置き換えられると、「剰余労働時間(剰余価値を生み出す労働時間)÷必要労働時間(賃金分の労働時間)」だ。
- ・例えば1日8時間労働の労働者がいて、4時間の必要労働で賃金分の価値を生み出し、残り4時間で資本家の利益になる剰余労働をしたとすれば、「4÷4=1」で、剰余価値率は100%ということになる。
- * マルクスは同時に古典派経済学者がいう間違った式も記している。
- ・「剰余労働時間÷1日の総労働時間」などがそれだ。
- ・この式では明確な剰余価値率は出せない。
- ・先ほどの例でいえば、「4(剰余労働時間)÷8(1日の総労働時間) = 0.5」で、剰余価値率は50%になる。
- ・この式でいけば、比率が100%を上回ることはけっしてない。
- ・剰余労働時間は総労働時間の一部なので、それが総労働時間を超えることは絶対ないからだ。
- * マルクスがあげた例をもとにすると、イギリスの農耕労働者が100個のジャガイモをつくったとすれば、そのうち4分の1の25個を受け取り、4分の3の75個を資本家に渡す。
- ・25個が必要労働分の可変資本で、75個がプラスαの価値 = 剰余価値である。
- ・この場合の正しい式から導かれる剰余価値率は300%だ。
- ・資本家は労働者が受け取る価値の3倍はピンハネしている。

- ・しかしまちがった式では、資本家は75%だけもらっているように見えてしまう。
- ・これでは労働者が救われないと、マルクスは考えたのだ。

【剰余価値率の計算法】

$$\frac{\text{剰余価値を生み出す労働時間}}{\text{賃金分の労働時間}} \quad \text{4時間で賃金分の仕事ができる場合、8時間働いた剰余価値率}$$

$$4 \div 4 = 1 \Rightarrow 100\%$$

【下記まちがった式では、比率が100%を上回ることはない】

$$\frac{\text{剰余価値を生み出す労働時間}}{\text{1日の総労働時間}}$$

■面白いほどよくわかるマルクスの資本論

土肥誠監修

※第1の定式——剰余価値率

$$\frac{\text{剰余価値}m}{\text{可変資本}v} = \frac{\text{剰余価値}}{\text{労働力の価値}} = \frac{\text{剰余労働}}{\text{必要労働}}$$

(※資本論 第1巻資本の生産過程 第3編絶対的剰余価値の生産 第7章剰余価値率 で記述されている。)

・剰余価値の可変資本にたいする比率 $\frac{m}{v}$ を、私は剰余価値率と名づける。(第2分冊 p68)

・剰余価値の可変資本にたいする比は、剰余労働の必要労働にたいする比に等しく、剰余価値率 $\frac{m}{v} =$

$\frac{\text{剰余労働}}{\text{必要労働}}$ となる。剰余価値率は、資本による労働力の、あるいは、資本家による労働者の、搾取度

の精確な表現である。(第2分冊 p72)

※すでにイギリスなどの古典派経済学者たちは「利潤率」「利子率」の表式を仕上げていたが、第1の定式の分母となっている可変資本部分が、「労働の価格」ではなく「労働力の価格」へ前貸しされた部分であるということには至らなかった。

※第2の定式——この式は古典派経済学者アダム・スミスやデヴィッド・リカードなどが考えた定式だ。

*アダム・スミス

・「経済学の父」と呼ばれるイギリスの経済学者・哲学者。主著『国富論』で近代経済学の基礎を確立、労働を富の源泉として労働価値説の基礎を築き、リカードやマルクスに支持された。

*デヴィッド・リカード

・自由貿易を擁護する理論を唱えたイギリスの経済学者。各国が比較優位に立つ産品を重点的に輸出することで経済厚生は高まるとする「比較生産費説」を主張し、労働価値説の立場に立った。

$$\frac{\text{剰余労働}}{\text{労働日}} = \frac{\text{剰余価値}}{\text{生産物の価値}} = \frac{\text{剰余生産物}}{\text{総生産物}}$$

・この定式は労働力の搾取が剰余価値の源泉であることを隠している。

・ここでは労働日またはその価値生産物が、資本家と労働者とのあいだに分割される比率を表現しているのであって、現実の搾取度を表わさない「偽りの外観」でおきかえていると、マルクスは批判する。

※第3の定式——この式は、もっと明確に搾取関係を表わしている。

$$\frac{\text{剰余価値}}{\text{労働力の価値}} = \frac{\text{剰余労働}}{\text{必要労働}} = \frac{\text{不払労働}}{\text{支払労働}}$$

- ・マルクスは、資本の自己増殖についての秘密は、資本が労働者の一定分量の不払労働を自由に行っていることだと訴える。
- ・剰余労働の期間では、労働力の使用は資本家のために価値を形成し、収益については資本家はそれを無償で手に入れたら、マルクスは述べている。

■超訳『資本論』 的場昭弘 著

※資本論でもっとも短い章だ。ここでマルクスは剰余価値率の意味を読者に知ってもらいたいために、いわばまとめのような形で書いている。

・表式 I

$$\frac{\text{剰余価値}}{\text{可変資本}} = \frac{\text{剰余価値}}{\text{労働力の価値}} = \frac{\text{剰余労働}}{\text{必要労働}}$$

- ・この表からわかることは、搾取の程度ということだ。
- ・労働者階級と資本家階級との取り分の問題、どれほどの価値を取られているか、言い換えれば、労働時間をどれだけとられているかという問題が、明確に図式化されているわけだ。
- ・マルクスはあくまで経済学の対象を二つの階級間の問題として考えているのだ。
- ・こうした式を明確にしたのはマルクスだけではあるが、スミスやリカードといった古典派経済学、いわゆる経済学のこれまでの学派は、前貸した資本によって、労働者がどれだけ剰余価値を生むかと考えたわけだ。

・表式 II

$$\frac{\text{剰余価値}}{\text{可変資本}} = \frac{\text{剰余価値}}{\text{労働力の価値}} = \frac{\text{剰余労働}}{\text{必要労働}}$$

- ・大きな違いは、前者がお互いの取り分が明確であるのに対し、後者では労働者の取り分は最初から問題になっていないということだ。むしろ生産物、労働日の中から、わずかながら資本家が剰余価値をお礼としてもらっているという外観が生じるのである。おのずと搾取率は低いわけだ。

■不払労働と支払労働

・マルクスは「表式 I」から「表式 III」を導き出す。

・表式 III

$$\frac{\text{剰余価値}}{\text{労働力の価値}} = \frac{\text{剰余労働}}{\text{必要労働}} = \frac{\text{不払労働}}{\text{支払労働}}$$

- ・「表式 III」ではもっと明確な搾取関係が表されている。
- ・それは自らの労働支出に対し、どれだけのものが代価として支払われたかがわかるからだ。
- ・そして、資本は労働を獲得し、そこから剰余を引き出すのではなく、じかに剰余労働を引き出すのだと述べるのだ。